

障がい理解教育におけるマンガの活用可能性 (第I報) —1950年代から2000年代におけるマンガの中の障がい(1)—

かわい しゅんすけ いけなが しんぎ
河合 俊典*・池永 真義**

*生野特別支援学校・**附属平野中学校

(平成26年8月29日 受付)

近年の日本文化の国際的評価の高まりから、文化作品としてのマンガは、今後積極的に教育で活用される可能性が大きい。本研究では、障がい理解を促すことをねらいとする障がい理解教育の教材として、障がい(者)が登場するマンガをとりあげ、その有効性(活用可能性)を検証する。そのための基礎作業として第一報では、1950年代～2000年代の日本のマンガに見られる、障がいのある登場人物の設定パターンについての概括的把握(人物像、置かれている状況、物語の傾向等)を行った。その結果、障がいのある登場人物の状況的描写の異なるパターンを抽出することができた。くわえて、それらの描写内容が現実の障がい者がもつアイデンティティのありようとも関連していることが確認できた。

キーワード: マンガ, 特別支援教育, 障がい理解教育, アイデンティティ

I 問題意識

「障害理解教育」(以下、「障がい理解教育」)の本格的な始まりは、当時の文部省が小・中学校における障がいのある児童生徒への理解・認識の向上、協力体制の確立、指導力の充実をはかるために、「心身障害児理解・認識推進事業」に着手した時期(1979)にまで遡ることができる。1987年には筑波大学(徳田克己研究室)で「障害理解研究会」が発足し、障害理解研究が組織的に進められていった。この研究会では障害理解を「障害のある人に関わるすべての事象を内容としている人権思想、特にノーマライゼーションの思想を基軸に据えた考え方であり、障害に関する科学的認識の集大成である」と定義し、そのような障害理解を進める教育を「障がい理解教育」とした。そして現在、このような障がい理解教育の潮流は、来る国際社会で要請されるインクルーシブ教育への展開を見据えた、学校教育として重要な取り組みとなっている¹⁾。

第一著者は特別支援教育(special needs education)、第二著者は美術教育(art education)という異なる専門分野の教育に従事している。両分野には支援教育と教科教育という違いはあるものの、ともに感覚的・直観的理解を大切にすることで共通する部分が多い。よって、特別支援教育における「美術教育」、あるいは美術教育における「特別支援教育」といった視点からの実践研究が考えられる。また、授業のユニバーサルデザイン化(UD化)といった今日的視点からも、両分野が互いに教育実践上の示唆・教示を与えあえることも多い。著者らはこれまで、このような専門領域の知見を活かしながら、総合的学習や美術・物づくりの授業などを場に、幅広い校種種の児童・生徒や地域、保護者、教員、大学関係者らとともに、「交流及び共同学習」を軸とする障がい理解教育に取り組んできた²⁾。

その取り組みの過程で、障がい理解教育を進めていくうえで絵本や児童文学、映画、マンガなどの表現媒体(以下、「文化作品」)を活用することの有効性について知った。これら具体的なストーリー展開をもつ文化作品には、適切な教材化をはかれば、障がい問題を知識として理解するだけでなく、直観的・感性的側面からより深く理解できる可能性がある。ただ、現状では障がい理解教育で扱われる文化作品は絵本や児童文学がほとんどを占めており(黒川・是永, 2006)、より障がい理解の実態に合わせ、障がい理解教育の幅を拡げる文化

作品の教材化・実践は少ないと言える³⁾。

とりわけ「マンガ」は、障がい理解教育に限らず、教育の場で活用されることの少ない表現メディアである（なお、本稿で「漫画」と表記しないのは、「マンガ」が現代における通例だということ、また扱う対象が全てストーリーマンガであるためである）。これは、マンガのストーリーが長いことから学校教育で扱いにくいという側面に加え、「少年非行に及ぼす影響」や「活字離れ」といった、マンガの悪影響にかかわる世論や論考が昔から根強くあることが背景にあると考えられる。しかし今日、日本のマンガに対する評価が国際的にも高くなっていることは周知の通りである。2000年にはマンガは文部科学省の教育白書によって公式に「日本の文化」であり、「重要な現代表現」と位置づけられた。同年には京都精華大学に日本発のマンガ学科が設立され（2006年には同大学にマンガ学部が開設）、近年、マンガを教育内容として扱う大学は増えている⁴⁾。また、義務教育においても、2002年度の中学校学習指導要領「美術」で初めてマンガが取り上げられ、教科書に載るようになった。なお、本稿ではマンガを「コマを単位とする『絵』とセリフや地の文における『文字』が融合した新たな物語表現形式」（倉田、2003）としておきたい。

このようなマンガに対する認識の転換からも、今後、教育でマンガが積極的に活用される可能性が大きくなっていくことが予想される。そしてその進展にともない、障がい理解教育においてもマンガを積極的にとりあげ（教材化）、授業にかけその有効性（活用可能性）を検証する事例も増えていくと考えられる。ただ、これまでも障がい理解教育でマンガを活用することの意義は唱えられてきた。にもかかわらず実践例が少ないのは、マンガにおける障がい児者の描かれ方に大きな注意を払う必要があったことがあげられる。マンガの場合、ビジュアルな表現媒体であるがゆえに障がいのある人物が過剰に美化されることも多く、そのインパクトのある表現が「純粋な障がい者」「前向きな障がい者」といったイメージ像にばかり目が向けられがちになる場合も少なくない。このような読者に与える印象（障がい者像）は、障がいに対する一面的な見方を助長する可能性もある。それだけに、障がい理解教育におけるマンガ活用には慎重さが求められてきたのである。だが著者らは、適切な教材化（あるいは指導方法の確立）がはかられば、マンガを活用した教育実践は、従来の障がい理解教育をさらに豊かにする可能性をもつのではないかと考えている。本研究で異なる専門分野が協働する意義も、まさしくこのような可能性を実現することにある。

II 全体構想と本論の構成

本研究の全体構想は、以下の通りである。

- ・研究課題①：1950年代～2000年代の日本のマンガに見られる、障がいのある登場人物の設定パターンについての概括的把握（人物像、置かれている状況、物語の傾向等）…第Ⅰ報
- ・研究課題②：第Ⅰ報で分析した傾向をふまえた、障がい種別・年代別に見た傾向と変遷及び、同時代の社説等からうかがえる障がい者を取りまく社会的状況との比較分析…第Ⅱ報
- ・研究課題③：マンガを活用した障がい理解教育の授業構想・実践・考察…第Ⅲ報

①及び②は理論的考察、③は、それらをふまえた授業の構想・実践・考察及び本研究の全体的考察となる。本研究全体の目的は、障がい理解教育におけるマンガの活用可能性を実践的に探ることにある。だが、その予備作業として、マンガにおいて障がい（者）がどのように描かれているのかについての俯瞰的視座の獲得が必要だと考える。そこで本論（第Ⅰ報）では、次節で簡単にマンガを対象とする研究の傾向を概観する。次いで、1950年代～2000年代の日本のマンガの障がいのある登場人物の設定パターンについて分析する。障がい種・年代を問わないので、このような作業は横断的研究と言える。これに対し研究課題②（第Ⅱ報）では、障がい種別・年代別に見た傾向と変遷を探る。そしてさらに、朝日新聞の社説等の文献を参照しながら、当時の障がい者を取りまく社会的状況と比較することにより、マンガに見られる障がい者観と社会的背景（世論や行政の基本方針等）との関連を明らかにしたい（第Ⅱ報）。このような研究は、研究課題①に対して縦断的研究と言える。最後にこれらの予備研究をふまえ、研究課題③（第Ⅲ報）において、具体的な校種や年齢を対象に、子どものレディネス等、様々な諸条件を考慮しながらマンガ作品を選定し、障がい理解教育の授業を構想・実践する。

Ⅲ 先行研究

学術的なマンガ研究は、マンガ研究そのものの歴史が浅いため、それほど多くない。マンガを批評の対象として扱う領域こそ広いものの、本格的なマンガ研究が生み出されるには、今後の発展をまつ必要がある。したがって教育におけるマンガ研究もほとんど進んでいない状況だが、それでも現在のマンガ研究の様相を捉えておくことは重要だと考える。ここでは主に、家島（2007）のマンガ研究の展望論文を参考にしながら先行研究について述べておきたい。

マンガは、他の文化作品と異なる特殊性をもつ。家島はそのような特殊性として、①絵とメディアからなる複合メディアであること（表現性〈可視性・可読性〉）、②大衆的で広く普及していること（大衆性）、③紙媒体の娯楽品であり、自分のペースで、疲れている時でも気楽に読める（易読性）、④フィクションで、人物・物語の設定・描写の自由度が高いこと（空想性）の四つをあげている。家島は、このようなマンガの特殊性が人間の心理に影響を与えやすい要因になると指摘しながら、これらの仮説の検証やマンガの影響についての心理学的な説明モデルを提示する役割が心理学にあると主張している。そしてマンガを対象にした心理学的論考として、磯貝の「漫画の心理学」（1964）や大内（1954）によるWolf & Fiske（1949）の「漫画ファンの分析」の紹介、また河合（1987）による青年期の感性とユングの概念を関連させた考察等をあげながらも、学会誌や紀要に掲載された研究論文は非常に少ないことを指摘している。そして主に学術的な研究領域では、主に教育心理学と認知心理学の領域に属する研究が多く、全体としては①マンガを学習教材として扱う研究（教育心理学的領域）、②マンガの読みに関する研究（認知心理学領域）、③思春期心性に関連させた領域（臨床心理学領域）の三つに大きく区分できるという。

これらの区分のうち、本研究にもっとも関連するのは、①の教育心理学的領域における研究かもしれない。この方向性は、マンガを学習教材として子どもの教育に役立たせようとする目的があるからである。ただ、それらの多くはマンガや文章読解や記憶に及ぼす影響を検討したり、マンガ教材と文章教材で記憶成績を比較する（e.g.向後, 1993, 1994; , 1996, 1998; 中村・白井, 2001）といった、思考力や記憶力などの能力をはかる学習・記憶心理学的研究にとどまる。また、①に近い心理学的論考として、これまで『児童心理』（金子書房）などでマンガの読ませ方に関する特集が組まれている。「マンガから読書指導へ」（滑川, 1964）、「家庭における漫画指導」（石黒1964; 今村, 1973）、「マンガに対する教師の受け止め方とその指導」（田宮, 1973）といった論考が見られる。ただこれらは、著者らが構想するような、マンガのコンテンツ（ストーリーや表現）を障がい理解教育の教育内容としてとらえ、マンガの教材化による教育的効果を検証しようとするものではない。あくまで啓発的なマンガ教育論のレベルにとどまっている。

そのような意味では、③思春期心性に関連させた領域（臨床心理学領域）の方が参照できる要素が大きいかもしれない。③では、特定のマンガ作品を通して思春期心性を考察したり、事例に対する理解を深めたりすることを報告する研究が主となっている。例えば、「日本マンガと自己形成：読者の自己恋愛物語をめぐって」（陳, 2011）も、このような領域に近い研究である。この論文では、恋愛をテーマに個々の読者のライフストーリーに接近することで、マンガが読者の自己形成にどのような影響を与えているのかを検討している。そして、人々がマンガから学ぶテーマには大きく「恋愛」、「友情」、「努力」、「人生」、「知識」の五つに集約できると分析する家島の研究（2006）を紹介している。このようなテーマは文化作品の表現形式を問わず、広く共通してみられるテーマである。ただ、このような抽象的観念についての理解を深めるというだけでは、少し単純過ぎるようにも思われる。「恋愛のすばらしさ」を文化作品から学ぶといっても、個々の作品によってその恋愛観はそれぞれ異なる。例えばLeeによる恋愛関係の類型論をふまえた場合、ルダス（遊びの愛 例：『ボヴァリー夫人』のエンマ）、プラグマ（実利的な愛 例：『細雪』の雪子）、ストーゲイ（友愛的な愛 例：『赤毛のアン』のアンとギル、『タッチ』の達也と南）、アガベ（愛他的な愛 例：『塩狩峠』の信夫）、エロス（美への愛 例：『キャンディキャンディ』のキャンディ）といった様々な愛の形（恋愛観）がありうる。障がい理解教育において文化作品を教材化する場合も同じである。何らかの障がい者観が、必ず物語の登場人物（主役か脇役かは作品によりけりだが）や置かれた状況に対する言動等から見て取れるだろう。

以上述べたいくつかの「マンガ研究」は、あくまで心理学的研究や心理学的論考における考察の一部である。これらに加え、重要なマンガ研究の情報源として学会誌『マンガ研究』（日本マンガ学会 2001年設立）があげ

られる。この学会誌により、マンガ研究は量・質ともに確実に右肩上がりを示すようになった。『マンガ研究』は、第1巻が2002年5月に発刊されて以来、これまで（2014年4月時点）20巻が刊行されている。著者らはこれら全てをあたった。シンポジウムやフォーラムなどの報告以外の、研究論文や研究ノートと称する論考では、表現規制に関わる問題を扱ったものは幾つか見られたものの、正面から「障がい」をテーマにしたマンガ研究は見当たらなかった。多くはジェンダー・セクシュアリティや少女マンガ研究、マンガ特有の表現形式に関わる考察、歴史的・社会学的研究、マンガ産業の展望や国際交流の動向、手塚治虫などの作家論などであった。

以上のマンガ研究のレビューから、その多くは認知心理学や教育心理学を中心とする学術的研究と批評的な論考で大半を占めていることが確認された。おそらくこれらの分野以外にも、マンガは文学や芸術学、記号論、サブカルチャー論やマスコミュニケーション論、社会学、産業論、言語学などの領域で語られていることだろう。だが、著者らの管見では、特別支援教育や障がい理解教育などの実践の手立てとしてマンガを扱った事例を学術的研究としてまとめたものは見当たらなかった⁵⁾。ただ、研究論文として、吉川淳一「文学・漫画にみる『障害』の捉え方」（一宮女子短期大学研究報告 第38号、1999）の一本があった。

もっとも、教育関係ではないが、マンガに登場する「障がい者」をテーマにした書籍が一点だけあった。永井哲『マンガの中の障害者たち』（1998 解放出版社）である。著者自身が聴覚障がい者で、聴覚・言語障がい者が登場するマンガを中心に批評している。この文献の最大のメリットは、巻末に「資料編 聴覚・言語障害者及びそれに関連する内容が登場するマンガ作品」の一覧があることである。本研究の課題①（本論）では、幅広く障がい者が登場するマンガを俯瞰する視座を得る必要があるため、本研究を進めるにあたって永井氏の文献はきわめて重要な資料になると考える。

IV 研究（課題①）の方法

本論では、1950年代～2000年代の日本のマンガに見られる、障がいのある登場人物の設定パターンについての概括的に把握することを目的とする。高校生、野球選手、ピアニスト、勝負師から殺し屋、侍、忍者に超能力者、これらは全てマンガの中に登場する、障がいを持った登場人物の立場や職業の一部である。このように、性別も年齢も職業も様々な障がい者たちがマンガの中には登場し、気をつけて探してみれば色々な場面で見つけることができる。障がいをテーマとしている作品において社会の不条理に立ち向かう主人公の姿は心を打つ一方で、誤解や偏見を反映した描かれ方をしている脇役も見ることができるだろう。

（1）障がいの定義

資料収集・調査に先だって、本研究で対象とする資料中の障がいとその定義を以下に示す。対象とするのは、特別支援教育の対象となっている①視覚障がい、聴覚障がい、知的障がい、肢体不自由、病弱。②注意欠陥／多動性障がい（ADHD）と高機能自閉症。加えて③言語障がいである。①については「教育基本法第22条の3」、②については「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」、加えて③については独立行政法人国立特別支援教育総合研究所、松村勘由の定義を参考に定義している。

①視覚障がい、聴覚障がい、知的障がい、肢体不自由、病弱

- ・視覚障がい者：両眼の視力がおおむね0.3未満のもの又は視力以外の視機能障がいが高度のもののうち、拡大鏡等の使用によっても通常の文字、図形等の視覚による認識が不可能又は著しく困難な程度のもの。
- ・聴覚障がい者：両耳の聴力レベルがおおむね60デシベル以上のもののうち、補聴器等の使用によっても通常の話声を解することが不可能又は著しく困難な程度のもの。
- ・知的障がい者：1. 知的発達の遅滞があり、他人との意思疎通が困難で日常生活を営むのに頻繁に援助を必要とする程度のもの。2. 知的発達の遅滞の程度が前号に掲げる程度に達しないもののうち、社会生活への適応が著しく困難なもの。
- ・肢体不自由者：1. 肢体不自由の状態が補装具の使用によっても歩行、筆記等日常生活における基本的な動作が不可能又は困難な程度のもの。2. 肢体不自由の状態が前号に掲げる程度に達しないもののうち、常時医学的観察指導を必要とする程度のもの。

- ・病弱者：1. 慢性の呼吸器疾患，腎臓疾患及び神経疾患，悪性新生物その他の疾患の状態が継続して医療又は生活規制を必要とする程度のもの。2. 身体虚弱の状態が継続して生活規制を必要とする程度のもの。
- ②注意欠陥／多動性障がい（ADHD）と高機能自閉症
 - ・注意欠陥／多動性障がい（ADHD）：年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力，及び／又は衝動性，多動性を特徴とする行動の障がい，社会的な活動や学業の機能に支障をきたすものである。また，7歳以前に現れ，その状態が継続し，中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。
 - ・高機能自閉症（アスペルガー症候群）：高機能自閉症とは，3歳位までに現れ，a. 他人との社会的関係の形成の困難さ，b. 言葉の発達の遅れ，c. 興味や関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする行動の障がいである自閉症のうち，知的発達の遅れを伴わないものをいう。また，中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。アスペルガー症候群とは知的発達の遅れを伴わず，かつ自閉症の特徴のうち言葉の発達の遅れを伴わないものである。
- ③言語障がい
 - ・言語障がい：話しことばが，その社会一般の話し方と異なっているために，話の内容よりも話し方に注意がいくために，コミュニケーションに支障が生じたり，話しての不快感や不適応をもたらしたりする状態。また，言語全体を含めて，言語情報の伝達及び処理過程における，言語の受容から表出に至るまでのいずれかのレベルによる障がい，言語の記号化，送信，伝達，受信，解号等の機能に支障を生じる状態。

マンガの作中に，このような具体的な定義が示されている資料は極めて少ない。そこで本研究では，先天性・後天性を問わず，障がいについて言及されているか，障がいがあると判断できる描写がある作中の登場人物を対象とする。このような緩やかな定義を採用した理由として，資料内における登場人物の障がいについて，それが障がいをテーマとしている資料であったとしても，厳密に示されているものが全くといっていいほどないということがあげられる。このように，基本的な定義をおさえつつ，比較的緩やかな定義で資料を見ていくことで，障がいの有無に関して妥当性のある判断ができるのではないかと考えた。このように本研究では，まず資料を収集・整理するにあたり，このような緩やかな定義を採用して資料，データを収集する。

（2）資料・データの収集方法

基本となる資料は，主に永井の『マンガの中の障害者たち—表現と人権』の資料編に掲載されている「聴覚・言語障がい及びそれに関連する内容が登場するマンガ作品」等を参考としながら，著者らが所有もしくは閲覧できる作品を整理・追加・収集した。資料から「障がいがあると考えられる人物」というデータを収集する際には，実物にあたって自らの目で判断するようにした。また，入手することが困難な作品については，京都市中京区烏丸御池にある京都国際マンガミュージアムの所蔵資料閲覧・研究室を利用した。

データに関しては，先に述べた緩やかな定義に従って収集している。その際には“見えない”“聞こえない”といったことが客観的に判断できる描写があることを基準としている。例えば視覚障がいであれば“目が見えない，見えにくいという描写や言及がある”または“盲導犬を連れていたり，白杖を持っていたりする”。聴覚障がいであれば“音が聞こえない，聞こえにくいという描写がある”“補聴器を装着していたり手話等を使用したりしている”。肢体不自由であれば“手足の欠損があったり，車いす，義足等を使用したりしている”。言語障がいならば“吃音を持っていたり，言葉を発することができなかつたりする描写がある”というところから判断する。なお，視覚的描写で判断することが比較的難しい知的障がい，病弱，ADHD，高機能自閉症の場合は，それらがあると推測することができる描写が資料内にある場合にのみ取り扱うことにする。そして重複障がいであることが推測できる人物が登場する作品は，1つの分野として取り扱う。また，自閉症に関しては，年代によっては“自分の殻に閉じこもっている”，“極端に内向的”という誤った理解に基づいて描写されている資料もある。しかし本研究では，それもまた当時の人々の自閉症に対する印象や知識を反映しているものとして，自閉症として分類し，調査・記述の対象とする。

V 分析

(1) 分析・論述形式

本論（第Ⅰ報）では、収集したデータを障がい種別と初出年代に従って整理し、作品ごとにあらすじや登場人物の特徴を記述する（表1）。紙面の制約上、作品ごとのあらすじや登場人物の特徴の記述（表1）については、各障がいのうち、主な作品だけをとりあげる。検討したマンガの一覧については、本論の最後に資料として示す。このような基礎作業をふまえ、第Ⅱ報では障がい種別ごとに登場人物の特徴、年代ごとの特徴とその変遷や、媒体ごとの傾向を分析し、記述する。

(2) 障がい者が登場する作品

以下に、作品全体のデータを示す。今回とり上げた作品は視覚14作、聴覚57作、肢体12作、言語60作、知的5作、病弱4作、発達4作、重複10作の計170作である。障がい種別で見ると聴覚障がいを扱った作品が最も多く、2番目には言語障がいが続く。3番目に視覚障がい、4番目に肢体不自由、重複障がい、知的障がい、病弱、発達障がいと続く。

〈表記例〉

① 作品名 巻数, ② 作者（原作者）, ③ 初出掲載誌, ④ 出版社, ⑤ 初出版行年

表1 障がい者の登場しているマンガ作品一覧（抜粋）

視覚障がい者の登場している作品			
①佐武と市捕物控 第9巻		①はみだしっ子	
②石森章太郎	③ビッグコミック	②三原順	③花とゆめ
④小学館	⑤1966	④白泉社	⑤1975
⑥主人公の一人であるあんまの市。幼少時に馬に蹴られて失明したため、護身のために剣を習い、居合の達人となる。しかし、雨で音が聞き取りにくくなることで、一人では何もできないと落ち込むこともある。		⑥主人公の一人であるグレアムという少年。厳しい父のいいつけを破って遊びに出た際に右目を失明する。また、慕っていた重病の叔母が、自分に角膜を移植するために自殺したことの罪悪感から、目を治療せずに家を出る。	
①雲盗り斬平 第9巻		①花の慶次 第11巻	
②さいとう・たかを	③ライドコミック	②原哲夫（隆慶一郎）	③週刊少年ジャンプ
④ライド社	⑤1983	④集英社	⑤1992
⑥主人公の斬平を狙う白井主水という仕事人。投げつけられた花札を刀で切り落とす。獲物につけた特別な匂いを追う羽虫の音を頼りに、斬平をどこまでも追ってくる。		⑥伊達政宗。右目の視力を失っている。不仲である母や弟の謀略を見破った際に、側近に、自らの右目について、光は見えないが人の心が見えると話す。	
①世紀末博狼伝サガ 第4巻		哲也一雀聖と呼ばれた男一 第7巻	
②宮下あきら	③スーパージャンプ	②星野泰視（さいふうめい）	③週刊少年マガジン
④集英社	⑤1996	④講談社	⑤1998
⑥祇園の闇竜と呼ばれる、手本引きという博打の達人。自ら視覚を奪い、聴覚を異常発達させている。力を生かして主人公を追い詰めるが、鋭くなった聴覚が仇となって突如発生した嵐の音に集中力を乱されて敗れる。		⑥大阪でモグリの医師をしているブー大九郎という玄人。戦争で視力を失うが、声で話の真偽を察知する聴力や、指先で牌を読む盲牌、盲牌をした全ての牌の位置を覚える記憶力による早上がりて主人公を追い詰め、一度は勝つ。	
①ハッピー！		①ARMS 第11巻	
②波間信子	③BE・LOVE	②皆川亮二	③週刊少年サンデー
④講談社	⑤1995	④小学館	⑤2000
⑥スキー中の事故のため、23歳で失明した高野香織が、一時は生きる希望を失いながらも、盲導犬のハッピーや様々な人々との出会いを通して、様々な困難を乗り越えていく。		⑥ニューヨークのハーレムで影響力を持っているママ・マリアと呼ばれる老女。目が見えなくなった代わりに、相手の心が見えるようになったと述べ、主人公の仲間たちに重要な示唆を与える。	

①いっしょに歩こう	①キミがみえなくても
②たなかしんこ	②流田まさみ
③シルキー	③デザート
④白泉社	④講談社
⑤1996	⑤2003
⑥盲導犬協会の新米指導員の憩が、訓練中の盲導犬たちとともに、視覚障がいのある人々や、彼らを取り巻く人々の様々な不安や困難に向き合い、成長していく。	⑥瑞穂という女性が、高校時代の片思いの相手であった悦郎と偶然再会し、失明した悦郎と支えあいながら、視覚障がいにまつわる様々な不安や周囲の無理解といった困難を乗り越えていく。
①RED 第17巻	①D-LIVE!! 第9巻
②村枝賢一	②皆川亮二
③ヤングマガジンアップーズ	③週刊少年サンデー
④講談社	④小学館
⑤2004	⑤2006
⑥アメリカ合衆国大統領の施設代理人の一人であるカーキという男性。視力を失っており、顔には布を巻いている。鋭敏な聴覚を活かして敵の気配や居場所を察知したり、斥候役で活躍している。	⑥ピアニストのフローレンス・ナイチンゲール。盲目。テロリストに占拠されたホテルで、室外で銃火器の安全装置を外す音を聞き取って伝えるなど、テロリストに立ち向かう主人公をサポートしている。
聴覚障がい者の登場している作品	
①愛のサイン集め	①遠い讚美歌
②東浦美津夫	②山岸涼子
③少女フレンド	③リボンコミック
④講談社	④集英社
⑤1965	⑤1970
⑥主人公である不二子の家の近所のろう学校に通う少年。ろう学校がそこにしかないことと、国鉄のダイヤ改正により、早朝から電車通学をしている。主人公が、署名を集めてダイヤを再改正させるきっかけとなる。	⑥幼いころの病気が原因で聴覚障がいとなったサリーという少女。聾唖学校から帰宅した時、初めは容姿のため周囲からちやほやされるが、耳が聞こえないと分かると距離を取られたり、襲われ、聴覚障がいを揶揄される。
①涙さんこんにちわ	①愛と誠 第9巻
②本宮ひろ志	②ながやす巧（梶原一騎）
③週刊少年サンデー	③週刊少年マガジン
④小学館	④講談社
⑤1972	⑤1973
⑥まり子という少女。生まれつき耳が聞こえない。そのことを恥ずかしく思った両親によって屋根裏部屋に閉じ込められて感情を持たないまま育つが、知人に預けられたことをきっかけに、周囲の人々の影響で、しだいに感情を表すようになっていく。	⑥ヒロインである愛の祖母。耳が遠く、大音量でテレビを見ている。敵役の権太が屋敷に乗り込み暴れていることに気が付かず、愛の友人である岩清水が彼女を助けに来た時も、中々事情を飲み込めず岩清水を苛立たせている。
①100万\$キッド 第3巻	①遥かなる甲子園
②石垣ゆうき（宮崎まさる）	②山本おさむ
③週刊少年マガジン	③漫画アクション
④講談社	④双葉社
⑤1987	⑤1987
⑥勝負師をめざす主人公のひろしとポーカーで対戦したミスターサイレント。耳が聞こえないが、観客の無意識の唇の動きを読み取って、ひろしの手札を見通し、追い詰める。	⑥風疹によって先天的に聴覚障がいのある福里ろう学校の生徒たちが、周囲の無理解や野球憲章の壁といった様々な困難を乗り越えて、野球部を作り、甲子園出場をめざす。
①MASTERキートン 第13巻	①天才柳沢教授の生活 第2巻
②浦沢直樹（勝鹿北星）	②山下和美
③ビッグコミックオリジナル	③モーニング
④小学館	④講談社
⑤1988	⑤1990
⑥保険調査員の主人公が訪れた店のマスターが、年齢のために、耳が遠くなっており、客が騒いでいても気にしていない様子となっている。	⑥主人公の柳沢教授が尊敬している電子計算機学者の教授。老齢で聴力が落ち、同じことを何度も聞き返すようになっている。
①愛しのバットマン	①君の手がささやいている
②細野不二彦	②軽部潤子
③ビッグコミックスペリオール	③mimi
④小学館	④講談社
⑤1992	⑤1992
⑥主人公の香山が属するプロ野球チームに移籍してきたキャッチャーの新城。死球のため左耳が聞こえにくく、平衡感覚にも問題が生じている。キャッチャーフライを取り落したり、呼ばれても気が付かないことを誤解されるなどして、センスはあるが控に甘んじている。	⑥生まれたときから耳が聞こえず、家とろう学校の世界だけで生きてきた美栄子が、自分の力で生きていくことをめざして企業に就職し、聞こえないことによる失敗や無理解に直面しながらも、手話を覚えた同僚の博文等に励まされて乗り越えていく。
①プリズムの声	①きみの声はくちの指
②大野潤子	②横谷順子
③プチコミック	③BE・LOVEパフェ
④小学館	④講談社
⑤1996	⑤2001
⑥アナウンサー志望の大学生である朝比奈鈴が、専門学校に通う中で聴覚障がいのある北森涼と出会い、親しくなっていくことをきっかけに、聴覚障がいについて考えるようになっていく。	⑥ろう学校の中等部から私立の普通高校に進学した女子高生の夏木るるが、聞こえないことに対する周囲の無理解や多くの事件に遭遇しながらも、父親の支えや、友人や教師たちとの出会いを通して成長していく。

肢体不自由者の登場している作品		
①バイオレンスジャック 第1巻		①陽だまりの樹 第8巻
②永井豪	③週刊少年マガジン	②手塚治虫
④講談社	⑤1973	③ビッグコミック
⑥近未来の日本の、巨大地震で壊滅した関東地方に専制君主国家の樹立をもくろむスラムキングに逆らった人々が、四肢と舌を切断されて、人間犬とされている。		④小学館
①てっちゃん		⑤1986
②池田文春	③スーパージャンプ	⑥主人公の一人である万二郎の婚約者の綾という女性。幕府に反抗していたことから捕縛されて厳しい取り調べを受け、その後遺症で目以外が動かなくなる。万二郎の家で看護を受け、しだいに回復する。
④集英社	⑤1996	①リアル
⑥生後3カ月で脳性まひと診断されたてっちゃんこと哲治という少年が、家族や学校、ボランティアの人々に囲まれて、ボランティアを探す苦労や、レストランや水族館への入場拒否といった無理解に見舞われながらも成長していく。		②井上武彦
①Flour ～フラワー～		③ヤングジャンプ
②和田直子	③別冊マーガレット	④集英社
④集英社	⑤2003	⑤1999
⑥自転車事故で半身不随となった中学3年生の葵が、一生車いすの生活になることに絶望しそうになりながらも、親友に助けや、同じく車いすの高校生等の人々との出会いを支えに、前向きに偏見や障壁を乗り越えていく。		⑥偶然知り合った少女をバイク事故で半身不随にしてしまった野宮、骨肉腫のため右足を膝下から切除した戸川、出来心で自転車を盗んだことで交通事故に会い半身不随となった高橋の3人が、車いすバスケットボールを通して成長していく。
言語障がい者の登場している作品		
①鉄腕アトム 第11巻		①歩いていこう。～車いすの女の子の結婚・出産物語～
②手塚治虫	③少年	②折原みと
④光文社	⑤1959	③デザート
⑥教会の鐘つき男。言葉を発することができず、字を書くこともできない。お世話になっている神父が殺害された時に犯人の情報を伝えようとするが、絵を使うしかなく、なかなか伝わらないため悔しがる。		④講談社
①鬼丸大将 第1巻		⑤2004
②手塚治虫	③少年キング	⑥バイク事故で半身不随となった看護師の純美が、不自由さや、周囲の態度の変化に悩みながらも家族や友人の支え、理解者との出会いを通して前向きに困難を乗り越えていく。
④少年画報社	⑤1969	
⑥主人公の鬼丸。ローマ人の父親を持つために、容姿から鬼とみなされ捕えられた際に、拷問として熱湯を飲まされ、のどが潰れて言葉を発することができなくなる。		
①明日子がんぼる		①スカルマン
②庄司陽子（粉川宏）	③少女フレンド	②石ノ森章太郎
④講談社	⑤1971	③月刊少年マガジン
⑥みみ子という少女。自閉性性格に基づく運動性失語のため言葉を発することができず、筆談をする。母子家庭でみじめな思いをさせたくないという母親の過度な期待が言葉の出ない原因であった。実家のスナックの権利を巡って暴力団に誘拐された際に、心配する母親の愛情に気づいて声が出るようになる。		④講談社
①ゴルゴ13 第17巻		⑤1970
②さいとう・たかを	③ビッグコミック	⑥主人公の妹である麻耶。両親の特殊な力を受け継いでおり、生まれつき言葉を発することができない代わりに、テレパシーなど超能力でコミュニケーションを図る。
④小学館	⑤1973	①コンチェルト“愛”
⑥ゴルゴ13への連絡係を務めているマークス・モンゴメリ。言葉を発することができず、誰も手を出すことができない刑務所に収監されていることから、敵の多いゴルゴの秘密を守るため、依頼の窓口として選ばれる。		②牧美也子
		③女学生の友
		④小学館
		⑤1971
		⑥主人公の杏子。母が亡くなってすぐに父が再婚相手連れてきたショックで声が出なくなる。聴覚障がいの青年と知り合い手話で話すことで親しくなり癒されるが、青年が視力を失ったため手話ができなくなったことで絶望し、2人で薬を使って心中する。
①俺の空 第2巻		
②本宮ひろ志	③プレイボーイ	
④集英社	⑤1976	
⑥川で流されているところを主人公の一平が助けたあき坊と呼ばれる女性。事故で両親を亡くしたショックで言葉を発することができなくなっている。言葉が出ないことにつけこまれて襲われてしまう。		

①言葉をくれた人	①マッシューズ
②森有子	③別冊マーガレット
④集英社	⑤1976
⑥中学生の雅美。吃音があり、教師や生徒に笑われることから孤立している。言葉などないほうがいいと考えるようになるが、同じく言葉の問題で孤立している外国人の少年と出会いを通して、改めて言葉の大切さを感じ、吃音の矯正所に興味を持つようになる。	②山田貴敏
	③週刊少年マガジン
	④講談社
	⑤1983
①パーム 第6巻	①蒼き炎 第9～12巻
②伸たまき	③ウイングス
④新書館	⑤1986
⑥探偵である主人公のもとに来た依頼者の恋人の姪であるティナ。歯科医の父親が自分の治療のために診療所に向かったところで強盗と鉢合わせし、殺される場面を目撃したショックで言葉を発することができなくなる。顔を覚えているために、自らも強盗に狙われる。	②石川サプロウ
	③ヤングジャンプ
	④集英社
	⑤1989
①明楽と孫蔵 第2～3巻	①画家をめざしてヨーロッパを旅する主人公の竹蔵が、パリで行き倒れているところを助けた浮浪者の少女。いつも笑顔だが、家族に捨てられて以来、言葉を発することができなくなった。
②森田信吾	③漫画アクション
④双葉社	⑤1995
⑥おはつという少女。実家の商店が脅しに屈しなかったことによって、勤皇の志士に家族たちを皆殺しにされる。自身は押し入れに隠されたことで助かるが、虐殺の光景を目にしたことで言葉を発することができなくなり、犯人の情報を伝えられず悔しい思いをする。	①哲也—雀聖と呼ばれた男— 第4巻
	②星野泰視(さいふうめい)
	③週刊少年マガジン
	④講談社
	⑤1998
知的障がい者の登場している作品	⑥新宿の玄人であるリサという少女。コロという情夫に去られて以来、ショックで言葉を発することができなくなる。その代わりに、その場の雰囲気や、気配を敏感に察知して、危険を回避することができるようになる。コロを見つけたことで言葉を発することができるようになるが力はなくなる。
①ひまわり咲いた	①馬屋古女王
②山岸涼子	③りぼん
④集英社	⑤1970
⑥施設にいるかなという少女。知的障がいがある。相談職員の家事手伝いとして住み込み、子どもたちに偏見を持たれつつも人柄を認められていく。が、子どもの一人が、本心ではないがかわいそうな子だと言ったことを聞いてショックから家を飛び出し、車にひかれてしまう。	②山岸涼子
	③ASUKA
	④角川書店
	⑤1985
①ビリーの森のジョディの樹	⑥聖徳太子と膳美郎女の間に生まれた子どもたちが、鈍いながらも人の言語を解する、身体は大きいが頭脳は子どもと評されている。蘇我入鹿は母の血の呪いと考えている。
②三原順	③花とゆめ
④白泉社	⑤1995
⑥主人公のビリーという少年。両親が亡くなり、叔父に引き取られた先で、身体が弱く手がかかるくせに、行動も表情も全部が薄ぼんやりとしてよくわからないと言われている。自身も他者の言うことがよく分からないことを自覚している。	①だいすき!!ゆずの子育て日記
	②愛本みずほ
	③BE・LOVE
	④講談社
	⑤2005
病虚弱者の登場している作品	⑥軽度の知的障害がいのあるゆずという女性が、理解者である夫を亡くしたことや、無理解といった様々な困難に直面しながらも、家族や友人、理解者に支えられて、働きながら一人で娘を育てていく。
①あほんだら	①地球へ…
②ささやななえ	③りぼん
④集英社	⑤1972
⑥主人公である秀一の妹。生まれつき身体が弱く、病気がちで、寒い日は表に出してもらえないほど両親に過保護に育てられている。秀一とその友だちのむつおと遊びに行った時に、川に落ちて亡くなる。	②竹宮恵子
	③マンガ少年
	④朝日ソノラマ
	⑤1977
①吼えろペン 第2巻	⑥太陽系外まで生活圏を広げた人類の末裔であるミュートと呼ばれる人々。生まれながらに虚弱体質で、他にも様々な障がいがあることもあるが、それらを補う超能力を備えている。
②島本和彦	③サンデーGX
④小学館	⑤2001
⑥マンガ家のアシスタントをしている主人公の一人に自転車でひかれた波香という少女。難しい病気で、手術を控えて入院している。主人公の手伝っているマンガにおける病弱な登場人物に自分を重ねていたところ、その登場人物が作中で死んだためにショックを受けるが、アシスタントが死なないバージョンを描き立ち直る。	①株式会社大山田出版仮編集部員山下たろーくん 第8巻
	②こせきこうじ
	③週刊コミックバンチ
	④新潮社
	⑤2003
	⑥ケータという少年。生まれつき心臓が悪い。母親が失職と病気のショックで失踪しており、主人公の友人が運営している孤児院で生活している。手術をすれば高確率で治るのだが怖がっている。主人公の野球チームが試合で勝ったことで勇気づけられて手術を受け、元気になる。

発達障がい者の登場している作品			
①はみだしっ子		①ケイの白い指 第1巻	
②三原順	②三原順	②佐多みさき	③漫画ゴラク
④白泉社	④1975	④日本文芸社	⑤1989
⑥4人の主人公のうち、グレアムとサーニンの2人が自閉症と述べられている。2名とも、自分の殻に閉じこもってふさぎこむことがある他、サーニンはボーダーの服にこだわっている。		⑥女優の娘のあやという少女が、一切声を発さず、無感動、無反応で、父親からももらった人形を取り上げようとするときだけ嫌がるので、自閉症といわれている。母親に近づく男性を人形で呪っていたが、呪いが跳ね返って襲われた時に、助けを求めるため声が出るようになる。	
①この星のぬくもり—自閉症児の見つめる世界		①光とともに…	
②曾根富美子	③描き下ろし	②戸部けいこ	③フォアミセス
④ベネッセ文化社	⑤1997	④秋田書店	⑤2001
⑥高機能自閉症のある愛里という少女が、人の顔の判別がつかないこと等特性に関わる困難や、両親の当惑、周囲の無理解や誤解にさらされながらも、理解者との出会いを通して成長していく。		⑥自閉症のある光という少年が、生まれてきてから成長していく姿や、それを取り巻く家族や教師、友だち等周囲の人々と共に障がい受容や日常の困難を乗り越えていく。	
重複障がい者の登場している作品			
①どろろ		① ㍿ (フォルテッシモ) で飛びたて!	
②手塚治虫	③週刊少年サンデー, 冒険王	②矢代まさこ	③週刊少年マガジン
④小学館, 秋田書店	⑤1967	④講談社	⑤1968
⑥主人公の百鬼丸。父親によって、天下をとる望みと引き換えに身体を48柱の魔神に捧げられ、48か所の器官がない状態で生まれる。生まれてすぐに捨てられるが、医者に拾われて生き延び、特殊な感覚と武器を仕込んだ義肢を持って、身体を取り戻すために魔神と戦う。		⑥亜美という少女。5歳の時に原因不明の高熱を出し、目が見えず、耳も聞こえず、言葉を発することもできなくなる。母親が無理心中を図るが助かり、以後、音楽で生きる実感を与えようとするジャズピアニストの父親に、館の中に閉じ込められて育つ。	
①真珠色の仮面		①アニー、きみは美しい	
②高階良子 (横溝正史)	③なかよし	②川上則子	③なかよし
④講談社	⑤1972	④講談社	⑤1973
⑥生きながら水葬されようとしていた慎一郎という少年。目が見えず、耳も聞こえず、話すことができない。自らに疑いが向かないようにしながら、不義の子として自らを追い出した甲野家に復讐するため、義眼に隠した殺鼠剤で次々と家人を毒殺していく。		⑥主人公のアニーという少女。生まれつき耳が聞こえず話すこともできない。家の恥と考えた両親によって閉じ込められて育つが、姉のボーイフレンドのジムと出会ったことで、その叔父の別荘で教育を受ける。ジムに惹かれるが、姉とジムの関係にショックを受けて家を出る。	
①馬屋古女王		①かぼちゃ白書 第1巻	
②山岸涼子	③ASUKA	②六田登	③ビッグコミックスピリッツ増刊
④角川書店	⑤1985	④小学館	⑤1989
⑥聖徳太子と膳美郎女の末娘である馬屋古女王。生まれつき目が見えず、耳も聞こえず、言葉を発することもできず、足腰も立たないが、超常的な力を持っており、周囲の人々を誘惑する。他の兄弟たちも何らかの困難があり、蘇我入鹿に、母親の血の呪いと評されている。		⑥養護施設で暮らす木下一郎という少年。戦中の生まれで、1歳の時に空襲の爆風によって視聴覚を失い、車いす生活を余儀なくされる。コミュニケーションの方法を知らなかったが、記者の田村に触覚で文字を教わり、感謝の手紙を書くことができるようになる。	
①どんぐりの家		①心の架け橋 (ある親子の挑戦)	
②山本おさむ	③ビッグコミック	②河合英則	③週刊少年マガジン
④小学館	⑤1993	④講談社	⑤1996
⑥聴覚障がいと知的障がいのある田崎圭子とその家族、同様に障がいのある子どもをもつ親たちが、卒業後の進路が少ないことや、家で生活リズムを失い苦しむ状況を変えるため、障がいのある子どもたちを受け入れ、力を発揮できる場所である共同作業所を立ち上げることをめざす。		⑥実在するもうろう者の福島智氏は、9歳で視覚を失い、音楽に希望を見出すも聴覚も失うが、母親と共に指点字を開発、前例がないということから多くの学校で門前払いされながらも、支援者の努力もあって東京都立大学に入学し、初めて視覚と聴覚に障がいのある大学生となる。	

（3）障がいの描かれ方

ここでは、マンガの中の障がいのある登場人物の設定、置かれている状況、物語の傾向等が類似しているものを取り出す。そして最後に、マンガの中での「老人性難聴」と「自閉症」に対する見方（誤解）について述べる。

①障がいのある登場人物が置かれている状況

まず、全体的に最も多かったのは「身体機能や感覚と同時に大切なものを失う人々」という傾向である。今回収集した資料には、障がいの種別を問わず後天的な障がいのある人々が多く描かれていた。内容的に多かったものとして、戦争や病気によって傷ついたことによって機能を失うもの、強いショックによって言葉や聴覚などを失うというものがあげられる。さらに身体機能や感覚の一部を失うと同時に家族や友人、夢や目標といった、登場人物にとって重要なものが同時に失われる描写がなされている傾向がある。例えば、事故や病によって障がい者となるパターンの典型として、手塚治虫の『ブラック・ジャック』があげられる。第125話「不発弾」は、自衛官や不動産会社の不正によって不発弾が完全に撤去されることなく住宅地となった土地に家があったために、不発弾の爆発事故にあってしまったブラック・ジャックが、危険性が残っているにも関わらず立ち入り禁止の看板を撤去した自衛官に復讐するという話である。その中でブラック・ジャックの母親も一緒に事故に会ったために四肢を失い、下腹部には穴が開き、声が出ないため話すこともできなくなったまましばらくして亡くなっている。また、事故を逃れた父親は失踪してしまっている。同じく182話「復しゅうこそわが命」では、テロリストの間違いによって小包爆弾を自宅に送り届けられ、家族と自分の四肢や声、視覚等を奪われた女性を、責任を感じたテロリストから依頼を受けたブラック・ジャックが治療する話である。失われた四肢や声帯は亡くなった家族のものを移植することで取り戻されるが、切れた視神経だけは修復することができず、視力だけは失われたままとなっている。111話「悲鳴」では、いい声を持ち声優になることを夢見る放送部の少女が登場する。ところが喉を酷使したためポリープができてしゃがれ声になってしまい、ブラック・ジャックに切除してもらったものの、治療後の注意を守らなかったため再び声を失う。人工声帯をつけてもらう代わりに1年間一切声を出さないことを要求された彼女は、何をしても声を発さないことを理由に他校の男子学生たちに襲われる。

手塚マンガ以外の作品では、水島新司の『球道くん』の第1巻、主人公の球道の母親が出産の際の難産で力みすぎ、鼓膜が破れて難聴になっている。耳で話せば聞こえるが、自動車のクラクションが聞こえないため道を塞いでしまい暴言を吐かれたり、街を歩いているときに悪口を言われたりしても聞こえなくなっている。また、聴覚が戻らないことを不安に思っており、時々発生する耳鳴りに苦しんでいる。元来神経質なことに加えて不安やストレスで神経が磨り減っていき、ついにはノイローゼになり自殺をはかる（未遂に終わる）。そして子どもと夫を残して失踪してしまう状況が描かれている。

続いて多いパターンが、「大きな精神的ショックによって何かを失ってしまう」という傾向の作品である。例えば、幕末の江戸を舞台に公儀隠密の明楽が、御付きの孫蔵が不逞の勤皇志士と対決する『明楽と孫蔵』の2巻及び3巻では、ショックで声が出なくなったおはつという娘が登場している。彼女の実家である商家は、脅しに屈せずお金を払わなかったために勤皇志士によって夜盗を仕掛けられ、彼女自身は押入れに隠されたため無事であったものの、家族や御用人が皆殺しにされる場面を目撃する。同じ歴史物では、地主の長男の川上龍太郎と小作人の長男の大山竹蔵が時代の流れに翻弄されながらも、世界一の画家を目指して東京やヨーロッパを巡る姿を描いた石川サブロウの『蒼き炎』がある。9巻以降では、家族に捨てられて以来声を発さなくなったフランス、パリの路上生活者の少女がヒロインの1人として登場している。

他にも、先述の『ブラック・ジャック』の第80話「幸運な男」では、中東の油田の爆発事故に巻き込まれたアラブ人の男が、自らの貧しい暮らしから逃れるために、同じ事故で死んだ上司である裕福な日本人技師の財布とパスポートを奪い、ブラック・ジャックの整形によって入れ替わり、日本へ渡っていく。そこで日本語を話すことができないという問題が発生するのだが、男はショックで声が出なくなった演技をして乗り切ろうとしている。そうして帰ってきたとき、日本人技師の母親は声が出なくなったことをひどく悲しむ。

このように、“目が見えない”“声が出ない”“手足が不自由”といった基準で作品内の登場人物を見ていくと、今ある何かを失う、同時にその登場人物にとって大切な何かを失う、そのことによって大変苦労するといった傾向の描写を見ることができる作品としては、『はみだしっ子』『ブラック・ジャック（復しゅうこそわ

が命)』『花の慶次』『PLUTO』『ブラック・ジャック (消え去った音)』『戦場交響曲 (戦場まんがシリーズ)』『眠りにつくとき』『球道くん (母の心の巻)』『海峡の女』『パズルゲーム☆はいすくーる (光線のメロディ)』『仰げば尊し! (緑の下の力持ちの巻)』『ベアマörder流介 (SCENE21 恩師)』『ナースステーション (沈黙の会話)』『愛しのバットマン (ザ・マスクマン)』『ふたり花嫁さん』『ブラック・ジャック (不発弾)』『紅いハンドル (ダブルキャスト)』『コンチェルト “愛”』『俺の空 (飯場に咲いた恋の花!の巻)』『ブラック・ジャック (悲鳴)』『メランコリーブルー』『ハロー張りネズミ (空白の奔流)』『北斗の拳 (心の叫びの巻)』『RISING UP』『パーム (スタンダード・デイトム)』『力王 (炎104)』『父物語 斧』『のぞみウィッチィズ (望の少年)』『蒼き炎』『ガンヘッド』『ケイの白い指 (デビューの日)』『真夏の国』『NINKU—忍空— (Vol.1 風助一陣の風)』『明楽と孫蔵 (悲劇の少女)』『哲也—雀聖と呼ばれた男—』『ブラック・ジャック (幸運な男)』の36作をあげることができた。これは収集できた資料の約5分の1を占めており、比較的多い数である。吉本充賜が1984年に『障害者福祉の焦点』で述べている調査において、「障害者」という言葉はどのような人たちのことだと思うかという質問に対して、結果は目の不自由な人約80%、耳の不自由な人約70%、手や足の不自由な人約80%、ことばの不自由な人約60%となっており、身体障がい者は高い割合で認識されているが、内蔵の弱い人約10%、ちえおくれの人約55%、難病にかかっている人約25%、精神病のある人は約20%と低い認識となっている。この調査結果からも、日本人の障がいの概念は、身体障がいとしてイメージが強く反映され、知的障がいや発達障がいについての認識は低いことが分かる。このことがマンガの中の障がい者にも反映されているのではないかと考えられる。

次の傾向として、「努力を重ねる人々」の像が浮かび上がる作品があげられる。これらの作品では、見えないことや手足が不自由なことで、社会や制度が整備されていないことによって生じる不便さを乗り越えるために、登場人物たちが練習や努力を重ねる描写が見られる。例えば『ブラック・ジャック』第74話「なんという舌」では、サリドマイド薬害のためにアザラシ肢症のある少年が登場する。彼はそろばんが好きだが手が使えないので、努力の末に舌を使ってそろばんができるようになる。しかし舌でそろばんをしているところを学校の同級生にからかわれてからは、恥ずかしさでそろばんができなくなる。それを見かねた先生が、ブラック・ジャックに死んだ子どもの両腕の移植を依頼する。そのことを無駄にしないため再び努力を重ね、手を使ってもそろばんコンクールの決勝まで駒を進めるほどになる。先に述べた「不発弾」や「復しゅうこそわが命」でも、身体を動かすことができるようになるために登場人物は厳しい訓練を重ねている。

このような傾向は、“障がい者や障がいそのものをテーマとして扱っている作品”にも多く見られる。横谷順子の『きみの声ほくの指』では、主人公が通う普通高校の担任教師が、自分が高校生だった頃に車いすで学校生活を送りながらも誰の手も借りず1人でなんでも行い、人並み以上の努力家で成績も優秀、一流の国立大学に進学し、一流の企業に就職し、誇りに思っている友人がいると話している描写がある。これらの例に代表されるように、先天性、後天性を問わず、何らかの障がいを持った登場人物が努力して機能を取り戻したり、それ以上の能力を発揮したりするといった描写を見ることが出来る。このような傾向を持った作品として、『佐武と市捕物控 (刻の祭り)』『PLUTO』『ピグマリオン』『あの美しい瞳を見たか』『ブラック・ジャック (なんという舌)』『ハード&ルーズ (FILE32・夢の刺客)』『ブラック・ジャック (不発弾)』『ブラック・ジャック (復しゅうこそわが命)』『きみの声ほくの指』の9作をあげることができた。

これらの登場人物は努力を重ね、障がいの無い人と同等かそれ以上の力を身につけたり、成功を収めたりしている者たちであり、作中においても周囲の者たちから認められている。そのような努力の結果か、あるいは何かを失った代替物なのか、マンガの中の障がいのある登場人物の中には一般的な人の能力を大きく上回ったり、特殊だったりする力を身につけているように描かれているものがある。そういった登場人物をさらに「力を強調するために障がいのある人々」としてとりあげ、みていく。各分野のスペシャリストを集めた世界的人材派遣会社ASEに登録されており、どんな乗り物でも乗りこなす高校生の斑鳩悟が様々な任務に挑んでいく皆川亮二の『D-LIVE!!』第9巻では主人公と同じASEの芸能部門に所属するジョナサン・ナイチンゲールという盲目のピアニストが登場する。彼は目が見えない代わりに音には敏感と言っているように、話している人間の声を聞くことで内容の虚実を感じ取ったり、パーティ会場を占拠しようとしているテロリストがマシンガンのセーフティを外す音など、他の人間が聞き取れない音を認識して状況を把握したりすることができるように描かれている。同作者の『ARMS』では、主人公の仲間たちに重要な示唆を与える人物として、ニューヨーク

のハーレムで暮らしているママ・マリアという老女が登場している。彼女もまた盲目で、足腰も弱くなっているが、目が見えなくなってもいろいろなものを見てきたと言っているように、手を握った人物の内面を見抜くことができる力を持っている。視力と引換えに超常的な力を身につけたという作品の例は、少年誌の脇役・敵役を筆頭に数多く描かれている。戦後間もない東京の新宿を舞台に、勝負の世界で生きている主人公の坊や哲が様々な玄人たちと麻雀で対決していくさいふうめい原案、さいふうめい原案、星野泰視作画の『哲也—雀聖と呼ばれた男—』、第7巻には、ブー大九郎という盲目の玄人が登場する。彼は戦争で視力を完全に失っているが、そのために聴力や触覚といった他の感覚が研ぎ澄まされている。指先で牌の絵柄に触れることによってそれが何の牌かを知る盲牌という技術をもち、牌をかき混ぜる際に全ての牌を使い、どの牌山に何が積み込まれているかということを知覚する。声の調子のわずかな変化や、不自然な振動を感じ取りイカサマを見破るなど強敵として描かれている。なお、彼はこの作品では主人公に勝っている数少ない1人である。また、勝負師が主役の作品としては、世界一の勝負師を名乗り、博打を生業にしているサガという男が生死を賭けて裏社会の勝負に挑んでいく姿を描いた宮下あきらの『世紀末博狼伝サガ』第4巻に、祇園の影竜という盲目の勝負師が登場している。彼は自ら視力を奪うことによって聴覚が常人以上に発達している。また、脳内の微弱電流を利用して可聴域外の高周波を発生させて発達した耳から増幅しづつけることで、対戦相手に幻覚を見せるという離れ技を披露している。サガをぎりぎりまで追い詰めるが、敏感になった聴力が仇となって集中力が乱れ破れてしまう。他にも、戦国時代の日本で、野心に満ちた父親が天下と引換えに魔神と契約したことで、身体の48の器官が無い状態で生まれてきた、手塚治虫『どろろ』の主人公百鬼丸は、眼球はないが超感覚で相手の顔を感じることができるなど、視覚の代わりに他の感覚が鋭敏になっていたり、超感覚を持っていたりするという描写は多く見られる。

視覚の他には、言語の障がいを補うための特殊な力という描写がところどころに見られる。先に述べた『哲也—雀聖と呼ばれた男—』の第4巻には、言葉を発することができないリサという玄人が登場する。彼女は玄人であったコロという情夫に捨てられたショックで声が出なくなり、同時に周囲の気配を感じ取り、危険を避けることができる力を発揮するようになる。特殊な能力を持っていたために両親を殺され、自らも抹殺されそうになった千里竜生が骸骨の仮面をかぶり復しゅうを重ねていく石ノ森章太郎の『スカルマン』では、生まれつき声を発することができないが、相手の頭の中に話しかけることができるなど、様々な力を持っている少女（摩耶）が登場している。テレバシーという点では神坂智子の『カレズ』にも言葉を発することができないが頭の中に話しかける力を持っている少女が主人公として登場している。古代のシルクロードを舞台に、能力のために異端者として迫害をうける彼女は、身を投げれば異端者を別世界へ導いてくれる井戸を通して様々な経験を経て成長していく。

聴覚障がいでは、石垣ゆうきの『100万\$キッド』中で、勝負師の道を行く少年ひろしの前に、ミスターサイレントという男が立ちふさがっている。聴覚障がいのために耳が聞こえないミスターサイレントとは、ポーカー対決において観客の唇の無意識的なわずかな動きを読み、ひろしの手札を読み取って苦しめる。また、竹宮恵子のSFマンガ『地球へ…』には、新人類であるミュウたちがそれぞれ視覚や聴覚、肢体などに先天性の障がいがある。同時に彼らはそれを補ってあまりある超能力を有している。作中では障がいを補うために、ほんの少しだけ感覚が鋭敏なだけだったが、成人に達したということを検査する管理社会システムの影響を受け、超能力が目覚めたという説明がなされている。

以上のように、マンガの中に登場する障がい者の中には特殊な能力を持っている者たちがおり、『雲盗り暫平（恐怖！虫の居所）』『佐武と市捕物控（刻の祭り）』『花の慶次』『世紀末博狼伝サガ』『哲也—雀聖と呼ばれた男—』『ARMS』『RED』『D-LIVE!!』『100万\$キッド（ミスターサイレント登場!!の巻）』『スカルマン』『唾侍（鬼一法眼）』『カレズ』『地球へ…』『どろろ』『ギャラリーフェイク（展覧会の絵）』『哲也—雀聖と呼ばれた男—』の前170作中17作である。個々の登場人物ごとに設定はあるが、ほぼ全てが失われた能力に対する保障として現れたり、身につけた力である。

障がい種別としては特に視覚や言語に関して多く見られる。それに対して、聴覚や知的障害、肢体不自由、病弱については割合が低い。これはマンガとして描く際の描写のしやすさと、人の近くにおいて大半の情報を得ているのが視覚であったり、言語が人間のコミュニケーション手段として重要な位置を占めることが考えられる。また、ここで紹介した登場人物たちは、前に紹介した人物達と比較して何かを失ったり、なかったりす

るといふ悲壯感が無いことが多く、むしろ得た能力のほうに焦点が当てられている。

また、先に述べた「努力を重ねる人々」の傾向からも伺えたことであるが、これらの作品群に登場する登場人物たちはより“見えない”“聞こえない”といった障がいがあるにも関わらず、それを乗り越えて、または逆手にとって力としているように描かれている。24時間テレビの障がい者の登場するドラマや企画に人気があるように、ここには人々に障がいをハンデキャップとしてとらえ、それを乗り越えて活躍している者に注目する傾向が現れているのではないだろうか。

②「老人性難聴」と「自閉症」

続いて「老人性難聴」についてとり上げておく。理由は、ICFの定義では障がいとして捉えられているが⁶⁾、一般的には障がいとして認識している人はあまりないと考えられるからである。しかし、“聞こえない・聞こえにくい”という点では同様であり、マンガの中での描かれ方がその他の聴覚障がい者と違い興味深かったので、ここでとりあげておきたい。

ながやす巧の『愛と誠』の2巻では、主人公の誠によって慕う人を傷つけられた座王権太が復しゅうとしてヒロインの愛の家に乗り込んで大暴れするのだが、唯一屋敷の中のおばあさんだけが耳が聞こえにくくなっていてため状況に気付かず、平然と大音量でテレビを見ている。愛を影から支える岩清水が、彼女を助けるために居場所を聞こうとするのだが、伝わらず何回も聞き返してきて焦る場面が描かれている。高井研一郎作『総務部総務課山口六平太』の松山立志編にも、このような耳が遠くなったおばあさんが登場する。松山の支社に転勤することになった六平太が宿泊する旅館のおばあさんが聞こえずに何度も聞き返し、急いでいる相手をやきもきさせる場面がある。他にも元イギリス特殊部隊のサバイバル教官で考古学者、現在は保険会社の調査員である平賀・キートン・太一が、研究費用を稼ぐために様々な依頼をこなす。『MASTERキートン』では、ローマにある酒場のマスターの聴力が落ちている描写がある。客の話の聞き返すことで、お客を苛立たせている場面を見ることができる。このような登場人物たちは『総務部総務課山口六平太（松山立志編）』『愛と誠』『憎らしいあいつでも…』『JINGI〈仁義〉（第26話 新聞）』『天才柳沢教授の生活（第17話 教授、恩師に別れを告げる）』『MASTERキートン（渡り鳥の黄昏）』の6作品で見ることができる。

何故、このように老人性の難聴の場合は笑いを誘うような描写とすることができるのだろうか。聴覚障がいのため聞き逃すという場面ならば他の作品にも多く見られる。聴覚障がいについて数多くの名作を残している山本おさむの『コキユ』では、主人公は方耳の聴力を高熱で失っていたために、同級生の必死の告白を聞き逃しており、20年ぶりの同窓会で再会してそのことを教えられる。また、細野不二彦作、プロ野球を舞台に強打者香山たちの活躍を描く『愛しのバットマン』第5巻では、死球のために左耳が聞こえにくくなった新城というキャッチャーが登場している。トレードでやってきた彼は音による判断が難しくなったことと、平衡感覚が悪くなったことによって一流のセンスを持ちながらも前チームでは控えに甘んじていた。現在のチームに来てからも、呼びかけられたことに気がつかず、無視したと誤解を与えてしまう。のがみけいの『風の中にふたり』ではヒロインのウェンディという少女が、想いをよせる聴覚障がいのあるクラスメイトのアレンとスムーズにコミュニケーションできないことに苛立っていき、アレンも遠慮して消極的になってしまう場面が見られる。宮谷一彦の『眠りにつくとき』では、聴覚障がいがあるヒロインが登場する。彼女が恋人のレーサーが出場している大会を見ているときに、恋人の車がトラブルを起こし爆発する。周りは騒然となるが、ヒロインだけは何も聞こえないので平然と恋人の帰りを待っている場面がある。

他にも聴覚障がいをテーマにした作品の中にも聞こえないことによる誤解やすれ違いは描かれており、中には取り返しのつかないことであったり、悲惨な結末に結びつくものであったりする。しかし年齢のために耳が聞こえにくくなるという状況に関してはそのような描写は無い。耳が聞こえにくくなるという事実が変わりは無いのに描写され方に大きな違いがある。ここにはやはり障がいというものを特別視する人々の意識が反映されているといえるのではないだろうか。

最後に「自閉症に対する誤解」について見ていく。高機能自閉症の原作者の半生をつづった曾根富美子の『この星のぬくもり—自閉症児の見つめる世界』では、主人公が小学校にあがるとき、自閉症のことを説明した母親に担任となる教師が以下のような趣旨の発言をしている。自閉症のような、自分の殻に閉じこもりがちで内向的な子どもたちを変えていくのが教師の務めである。しかし、自閉症はそのようなものではない。このように、よく知られていないために字面で意味を判断して誤解をしている描写が特に自閉症に見られる。以下

ではそのような作品をとりあげる。

人を癒す力のある指を持つ大井圭が、その力を使って苦しんでいる人々の力になっていくという、佐多みさきのサスペンス作品『ケイの白い指』第1巻収録「ブードゥー」では、自閉症といわれているあやという少女が登場している。彼女は言葉を一切発さない。亡くなった父親に貰った人形を奪われたときだけは嫌がるのだが、それ以外は刺激に無反応・無感動であることが多い。指をさしてもその方向を見ない場面も描かれている。また、母親で女優の蘭ミドリとつきあっているプロデューサーが然るべき施設に入れて治療するべきだと発言する場面がある。母親を奪われることを恐れたあやが、父親から貰った人形を使って母親に近づく男達を変死させ圭も殺そうとするのだが、呪いの反動によって逆に人形に襲われて、母親の助けを呼ぶために初めて声を出す。そして助けに来た母親に自分の気持ちを話すことで親子の関係が深まるといった展開をしている。イギリスを舞台に、それぞれ様々な事情を抱えて家出した4人の少年たちが人々や事件との出会いを描いた三原順の『はみだしっ子』では、明言はされていないがその少年たちの2人が自閉症であると設定資料集に記載されている。しかし、作品中には自閉症の特徴を見ることはできない。自閉症とされているうちの1人のグレアムは、問題があっても1人で抱え込んだり、自分の殻に閉じこもったりする描写が多い。もう1人のサーニンも、一度決めたら退かない性格や、行動力に優れていると設定されていて、作中においても自閉症の特徴にあたるものは見られない。但し、どんなときでも常にボーダー柄の服を着用しているという、こだわりのある描写がされている。これらの作品以外にも、『明日ががんばる』『はみだしっ子』『ケイの白い指（ブードゥー）』の3作に、自閉症が誤用されている人物が登場している。これらの資料を見ていくと、自閉症と言われている登場人物たちは字面上の意味を捉えて自分の殻に閉じこもりがちであったり、こだわりや反応に乏しいといった自閉症に見られる特徴を部分的に備えていたりするものの、現実とは程遠い描写がなされている。前者は1980年代、後者は1970年代の作品であり自閉症という言葉が一般的にはほとんど知られていなかった時期の作品である。社会の中の知識や印象がマンガ内の表現に反映されているという例であるといえる。

（4）「障がい」とアイデンティティ

以上、選定した170作品の中から主な作品を例に障がいのある登場人物の描かれ方について分析してきた。「描かれ方」とは、どのような障がいのある人物が、そのような状況下で、どのような意思をもって、どのような行動をとっているのか、という意味での描かれ方である。本論では美術的表現の次元からの「描かれ方」については述べていない。このような表現論的視点からの考察も重要だが、別機会でもとりあげたいと考える。

さて、以上の分析から理解出来ることは、「障がい」の否定・肯定をめぐる「障がい」の意味づけや障がい者自身のアイデンティティに関わる問題である。通常では自らのアイデンティティに対し否定的に作用することの多い「障がい」をどう捉えるのかという問題は、障がい者自身に大きく関わる問題である。また、障がいのない人にとっても、「障がい」をどう意味づけ、障がいのある者に対してどのような態度をとるのかといった視点から、この問題は避けられない。障がい理解教育では、まさにこのような両者のアイデンティティに関わる問題として考えさせなければ、きわめて表面的な教育に終わってしまう危険性がある。例えば「障がい」が克服されるべきものか、肯定されるべきものかという問いが立てられるのも、そのような障がいの意味づけと障がい者が、アイデンティティの重要な要素としてとらえられている事情の反映だと言える。学校教育では、このような次元の問題が立てられること自体が少なく、「障がい者に対して優しくしよう」「障がい者を差別してはいけない」などといった、抽象的な徳目主義による教育が多いように思われる。例えば「いのちの教育」と称して、いじめにあって自殺した子どもの遺書などを紹介し、感想を書かせるといった実践がある。しかしそこでは無条件に「いのちは大切だから、死んではいけない」といった徳目（抽象的観念）が再生産されるだけで終わることが多い。だが、実際には「生きていること」（すなわち「いのちがあること」）は、無条件に肯定されるものではない。人は、いのちがあるからこそ行い得ること、感じる事、考え得ることがあり、それらが有意義だと思うからこそ「いのちは大切」だと感じているのである。ようするに「生きがい」である。したがって、この生きがいは何かについて深く探求しなければ、いじめる側も、いじめられる側も、直接関係のない側も、いのちの大切さを理解することはできない。そして現時点で生きがいがない場合は、これからの将来において有意義な経験が数多く待ち受けているだろうと想像する「意志」（こころざし）をもたせなければならぬ。そしてその意志があればこそ、いじめる—いじめられる関係性は消失していく。

このことは障がい理解教育においても同様である。この問題については、星加良司が「障害」が克服されるべきものか、肯定されるべきものかという二者択一的な問い自体が「社会の差別主義的な本質（ディスエイブリズム）を隠蔽することにつながる」とし、実際にはこれらは「障害者のアイデンティティの肯定化の中で併存し得るもの」であることの指摘が参考になる⁷⁾。このような併存も、「生きがい」が感じられるかどうかにかかっている。「障がい」を「できないこと」と読み替え、「できないこと」が否定的に考えられることがある。だがそれは、特定の条件下で成立する場合に過ぎない。「できないこと」が否定されるのは、その周辺の側の都合であるに過ぎない。その意味で、「できないこと」は当事者にとっては積極的に肯定される可能性をもっている。よって「できない人」「できないという現象」に対して、その周辺側は何をどうすべきなのかを具体的に考えることこそが、障がい理解教育では重要な視点になると思われる。本論でみてきたマンガでは、様々な障がいのある人物が、自身の障がいをアイデンティティの重要な要素としながら、一筋縄ではいかない物語の展開の中で自身のアイデンティティの肯定化をめざす姿が描かれている。そのストーリーに見られる紆余曲折は、決して単純な道徳的教材と同じレベルではない。それだけに、マンガは障がい理解のみならず、自己理解（読者自身のアイデンティティの肯定化）を深めていく上で大きな影響を与える可能性をもつと考えられる。

VI おわりに

本稿では、障がい（者）が登場するマンガをとりあげ、障がい理解教育の教材としての有効性（活用可能性）を検証するための基礎作業として、1950年代～2000年代の日本のマンガに見られる、障がいのある登場人物の設定パターンについての概括的把握を行った。その結果、身体機能や感覚と同時に大切なものを失う人々、大きな精神的ショックによって何かを失ってしまう人々、障がいゆえに努力を重ねる人々、力を強調するために障がいのある人々といった、障がいのある登場人物の描かれ方の異なるパターンを抽出することができた。くわえて、多くのマンガにおいて、様々な障がいのある人物が自身の障がいをアイデンティティの重要な要素としつつ、複雑な物語の展開の中で自身のアイデンティティの肯定化をめざす姿が描かれている（現実の障がい者や読者がもつアイデンティティのありようとの関連）がゆえに、教育における活用（教材化）の可能性があることが確認できた。

このような基礎作業をふまえ、第二報では、障がい種別・年代別に見た傾向と変遷や、同時代の社説等からうかがえる障がい者を取りまく社会的状況との比較分析を行いたいと考える（縦断的分析）。これらの研究課題を通して、最後に特定のマンガ作品をとりあげ、障がい理解教育に資する教材開発及び授業の構想と実践を行う（第三報）ための示唆が得られることを期待している。

引用・参考文献

- [1] 冨永光昭編著「小学校・中学校・高等学校における新しい障がい理解教育の創造 交流及び共同学習・福祉教育との関連と5原則による授業づくり」福村出版, 2011.
- [2] 永井哲「マンガの中の障害者たち」解放出版社, 1998.
- [3] 家島明彦「心理学におけるマンガに関する研究の概観と展望」京都大学大学院教育学研究科紀要, 2007.
- [4] 陳欣「日本マンガと自己形成：読者の自己恋愛物語をめぐる」弘前大学大学院人文社会科学研究科修士課程論文, 2011.
- [5] 松井豊「恋ころの科学」サイエンス社, 1993.
- [6] 家島明彦「理想自己像に影響を与えた人物モデル」京都大学大学院教育学研究科紀要, 2006.
- [7] 今村秀雄「家庭におけるマンガの指導」児童心理, 1973.
- [8] 磯貝芳郎「漫画の心理学」児童心理, 1964.
- [9] 田宮武「マンガに対する教師の受け止め方と指導」児童心理, 1973.
- [10] 日本マンガ学会編「マンガ研究」, 2002.5, 2002.10, 2003.3, 2003.11, 2004.3, 2004.12, 2005.4, 2005.12, 2006.4, 2007.4, 2007.11, 2008.5, 2008.11, 2009.4, 2010.3, 2011.3, 2012.3, 2013.3, 2014.4.

- [11] 大阪教育大学特別支援教育講座「平成24年度大阪教育大学『重点的教育研究創造推進事業報告経費』インクルーシブ教育に対応できる教員養成推進プロジェクト報告書」2013.3.
- [12] 白井裕美子「学習教材としてのマンガのあり方—挿入質問の効果と説明文マンガ化の意義—」日本教育心理学会44回総会発表論文集, 2002.
- [13] 星加良司「『障害』の意味付けと障害者のアイデンティティ——『障害』の否定／肯定をめぐる—」ソシオロゴス, 2002, 26: 105-120.
- [14] 宇佐美寛「『命の授業』についての疑問」宇佐美寛・問題意識集8巻 授業をどう構想するか, 明治図書, 2003.
- [15] 黒川亜希子・是永かな子「障害理解教育の実際と課題—高知市立小学校における取り組みを中心に—」発達障害研究, 第28巻第2号, 2006.
- [16] 吉川淳一「文学・漫画にみる『障害』の捉え方」一宮女子短期大学研究報告 第38号, 1999.

注

- 1) 「障害者の権利に関する条約第24条によれば、「インクルーシブ教育システム」(inclusive education system, 署名時仮訳: 包容する教育制度)とは, 人間の多様性の尊重等の強化, 障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ, 自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下, 障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組み」(文部科学省「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)概要」より抜粋)を意味する。
- 2) 「特別支援教育は, 共生社会の形成に向けて, インクルーシブ教育システム構築のために必要不可欠なもの」(前掲)であり, 「特別支援教育に関連して, 障害者理解を推進することにより, 周囲の人々が, 障害のある人や子どもと共に学び合い生きる中で, 公平性を確保しつつ社会の構成員としての基礎を作っていくことが重要」(前掲)とされる。標題にある「障がい理解教育」は, そのような基盤をつくるための教育である(内容論)。それに対し「交流及び共同学習」は, そのような教育内容を教えるための重要な手立て(形態論)である。著者らの取り組みについては, 大阪教育大学特別支援教育講座「平成24年度大阪教育大学『重点的教育研究創造推進事業報告経費』インクルーシブ教育に対応できる教員養成推進プロジェクト報告書」(2013.3, 2014.3)に詳細が報告されている。
- 3) 富永光昭編著「小学校・中学校・高等学校における新しい障がい理解教育の創造 交流及び共同学習・福祉教育との関連と5原則による授業づくり」(福村出版, 2011)では, 著者の丸山啓史氏による, 障がい理解教育で活用できる可能性をもつ多くの文化作品(絵本・児童文学, 映画, 漫画)が紹介されている。漫画は計22点が紹介されているが, うち半分以上がいわゆる「少女マンガ」であり, ジェンダーの問題との関連も示唆され, 興味深い。
- 4) Business Journal「マンガがついに義務教育に!?迷走するマンガ教育の実態」では, 文部科学省の大学設置・学校法人審議会に提出(2012年4月)された設立認可申請の中に, マンガに特化した大学(「大阪総合漫画芸術工科大学」)が含まれていたことが話題となったことを紹介し, 京都造形芸術大学(マンガ学科), 大阪芸術大学(キャラクター造形学科), 宝塚大学(マンガコース), 東京工芸大学(マンガ学科), 文星芸術大学(マンガ専攻), 名古屋造形大学(マンガコース)など, 関西圏や地方大学を中心に増加傾向を見せていることを紹介している。http://biz-journal.jp/2013/12/post_3497.html
- 5) 表現論を重視する美術科教育学においては, すでにいくつかのマンガに関する論文が発表されている。例えば相田隆司による論文「美術教育における漫画の位置づけをめぐる一考察: 中学校における日常の豊かさを見出させることを視野に入れた実践を通して」(美術教育学: 美術科教育学会誌(21), 1-12, 2000, 美術科教育学会)を参照されたい。この中で相田氏は, 「漫画が大きな文化領域として成熟したという漫画文化の成熟が, それを教育の場で語ることを容易にした点や, 美術という枠組みの揺らぎともいべき状況が, 漫画という表現を取り込ませることを可能にした点などを指摘できると考える。」と述べている。
- 6) ICF(International Classification of Functioning, Disability and Health)の邦訳は, 国際生活機能分類。2001年のWHO総会において改定された, 人間と環境との相互作用を基本的な枠組みとして, 人の健康

状態を系統的に分類するモデルを意味する。大きく「生活機能と障害」と「背景因子」の2分野からなり、生活機能 (functioning) は「心身機能・身体構造 (body functions and structures)」「活動 (activities)」「参加 (participation)」の3要素で、背景因子 (contextual factors) は「環境因子 (environmental factors)」と「個人因子 (personal factors)」の2要素で構成される。障害 (disability) は、構造の障害を含む「機能障害 (impairments)」「活動の制限 (activity limitation)」「参加の制約 (participation restriction)」のすべてを含む包括な用語として使われている。

- 7) 星加は、『『障害』の意味付けと障害者のアイデンティティ——『障害』の否定／肯定をめぐる』(ソシオロゴス, 2002)の中で、『『障害』という語の多義性や、その構造に関して十分に分節化されないまま議論されているように思われる。障害者が『障害』の否定／肯定を語る時、その『障害』は文脈に応じて様々な意味内容を持っている。ところが、『障害』の有する意味について十分な理論的探求は行われていない。より正確に言うならば、『障害』の意味をめぐる種々の議論は、『障害』の持つ多層的な意味内容を十分に把握していないために、論点を曖昧にしているように思われる。』と述べている。著者らは、マンガを教育で活用する利点として、このような『『障害』という語の多義性』を直観的・感覚的に理解するメディアになり得る可能性を考えている。

Possibility of Utilizing Comics of Japan for Special Needs Understanding Education (Part 1):
The Disabled Person who will Appear in the Japanese Comics in the 2000s from the 1950s

KAWAI Syunsuke* and IKENAGA Shingi**

* *Osaka Municipal Ikuno Special Needs Education School, Ikuno-ku, Osaka 544-0014, JAPAN*

** *Hirano Junior High School attached to Osaka Kyoiku University, Hirano-ku, Osaka 547-0032, JAPAN*

The purpose of this research is to explore a possibility of utilizing Japanese comics, in order to deepen a Special Needs Understanding Education. In the main subject, the comics of postwar Japan in which a disabled person appears are collected as basic work for it. And we analyzed about the feature of the situation where they were placed, based on them. As a result, it turned out that some patterns are in the situation which can require the disabled person who appears in comics. Furthermore, it became clear to be connected also with the identity which a disabled person with those actual situations has.

Key Words: Japanese comics, special needs understanding education, identity